

地名の地理學的考察とその一例（二）

小林 伍一郎

一、地名の地理學的考察に就いて

余は地理學的踏査に當つて、自然に於いても人文に於いても、なべてこの地理學的要素と地名の關係の深さを痛感し、且つはそのフィールドに對する親しみは之を助長して、遂に先づその地域の地名の涉獵に着手せしめたのである。計畫は未だ未完成なるものであるが、今茲に地名の研究と地理學の關係につきて卑考を試み、併せて研究のプログラムに對する方法論的批評を世に乞はんとするのである。

本來地名は或は邦語の古語研究の爲め、或は音韻學の研究資料として、或は一般國語史の研究上國語學者のよく取扱ひたる處であつた。然し乍ら之れは地名を言辭としての處置である。この地名を地理學的に見ての系統的研究を致せ

し人は極めて少數である。嘗つて吉田東伍氏地名辭書の汎論に於いて地名總説を編む。系統的研究の業讀すべしと雖も、地理學より之を見る時、採るべきは起因論・原義論及び地名界域と性格の論等若干にして、地理學的批判を試みれば正しく之れ未だ地理學者のものとするべきでない。彼以外短篇など間々之を見たるも、地理學的觀點より見れば皆等しく同類となすものが多い。中に往年山崎博士の地理學評論上に載せたる西洋地名に關する記載の如き類は、よき一局面觀とすべきである。

抑々地名は之れ人の呼びなせるものである。されば余は茲に地理的意義を求めて、「人類の見たる地面の稱呼、乃ち人類の生活面と見做しての地面を呼べるもの」と考へ度いのである。此

の文もその假定の下に見たる地名と、人類の生活面としての自然と人類生活との關係を、學ぶ地理學との連鎖を想はむとするものである。その自然と地名、聚落名としての地名と聚落研究、民族及その歴史又はその心理と地名等の諸關係は、地理學的研究に織込むべき最も興味あるものと思考するのである。

二、準備と方法

吾々はまづその地名辭が如何なる意味の者であり、如何なる起源を有する者なるかを知らねばよく處理することが不可能であること論を待たぬ。されば語學的研究も參酌應用せねばならぬ。この語學的方法是前述の如く、本邦に於いて最も古來より發達せる方面である。大別して音韻、文字の二論に別れ、前者は字音に重きを置き、音にその義を探り、或は相通相同―轉訛論によりて古體を究めむとし、後者は文字に依據し、假借、正略、誤訓、轉用等に基きて論ずるものである。而かもこの二方法並用せねば完さ

を得ぬものである。總じてこの語學的方法の第一義は、地名辭の原義を探るにある。他而地名の起原乃至は由來を探ぐるは、史學的方法ともいふべきである。風土記の如き記點は、この歴史的觀點に第一義を置けるものとなさねばならぬ。これはその他の民族心理の方面などよりの方法と共に地理學的研究に重要な關係を有するものであるが、語學的方法と史學的方法とは亦不離の關係がある。地理學者は地理學的觀點より、之等に對して研討を與へる程の態度に出で得る如きまでに、地名の地理學的考察を系統的に組織し、獨立せしめたいと思惟するのである。

三、地名研究の階梯と分類

余は地名の實際研究に於いても一定の系統なかるべからずと考へ、研究方法の運用階梯を二期に分つ。

歸納期 先づ蒐集である。然して地名には原義、起源の不明なる者は尠くない。その不明辭

を涉獵せねばならぬ。その不明辭につき解釋を下すは勿論記載を爲す場合は之等に對する自己の判斷を示した後に始めて處理する必要がある。乃ち筆者の定義を明示する義務が存する爲め、記載に於いても述べる必要あるものと思惟する。又地名はすべて之を拾集して、異同により類を別にし、更に各類と他の類との間の特性と一般性とを擲きて歸納の綱をすぼめて行く。之れ科學の有する一面である。その課程に於いて殊更に地理學者の注意すべき事を認むるのである。そは、所により自然環境の異なること——自然的條件——、所により外來人種及び文化のあること——民族學的及歴史條件——引いては外來語あり、又同文同語と雖も特殊の方言の存すること——言語學的條件は、地名が土地に固定せるもの即ち土着性に作用して、各地域に於いてその土地特有の色徴あらむことそれである。具體的に之を述べれば平地と山地、水邊と内陸とは地名詞の差異顯著にして、山間の人文的變動なき地と、開

放されたる人文繁多の地殊に新開拓の地とは名辭の新古の時代さへ異つてゐる。又方言の進展はこゝに絮說せざるも、同一言語にして暖き方へ傳播し行きたるは、寒き方へ行きたるよりも入聲音調くなるが如き、更に或る地區にはAなる外來語の雜れるに、或る地區には之がなく、又は異なるBなる外來語の方多く殘存する事あり、風俗、政治等亦然りである。斯かれば歸納し行く中に地域的特色は自ら覺知さるゝ程にして、最初より區域的研究をなすを至便至當とする。これ亦地理區を想到すること多きものである。そは土地に依據せる人類生活の生産たる地名の必然の結果であらう。乃ち地名の地方性は區域的研究を要求する。

演繹期 歸納期に得たる原則は、演繹體に態而化されねばならぬ。演繹的記載は科學の完全態の記載である。こゝに於いて余は地名の演繹的分類を試みたのである。地名の分類はまづ名辭そのもの、即ち品詞によりて分類するは容易

なるが如く思はれる。而して純粹の文法的品詞によるものは、今茲に云爲する要もないであらう。勿論地名は既に固有名詞なるも、その名詞化される以前の體を取りての謂である。併れども地名の有する時代は長く、新古の差も大である。而して長時代に互れる各種地名には語格語系など異りあり、之に時代を加味せし分類法は便なるが如く思惟する例へば、A、支那との交渉期以後、B、鮮との交渉期以後、C、アイヌ語、D、以外の日本本來語時代（邦語は本來鮮來の語と解する人さへあるも鮮系、アイヌ系以外の古語をこのDとす）等の如くである。故に困難なる事ながら明白なる物は各品詞毎に各々A B C Dの四級に分ちて區分するは便なる事とする併れども敍上の分類は、地理學上よりは未だ參考にして、地理學のものならず、地理學的分類と呼ぶべきものでない。されば余は文法上の品詞を採らず、地理學名辭を用ひて試みたらばと思ひて左の如き表を案じたるも、未だ不備にして淺

薄の點なしとせず、讀者の批正を希ふのである。

地理的名

人文地理的地名	自然地理的地名	
	第一自然地名	靜的自然地名
	第二自然地名	動的自然地名
人文地理的地名		
第三生活地理的地名	第二生活地理的地名	第一生活地理的地名

こは余の假りに撰びたる語なれば、些かの説明を加へねばならぬ。自然の部は無生自然と有生自然とに分ち呼ばむと思考さるゝも人文の部の分類との關係より、第一第二としたのである。又全自然を靜的と動的の二自然に分つも便ならむと案じたれども、その場合は動的を二分して無生の動的自然を第一班とし、有生の動的自然を第二班とすべく思はれたのであるが、共に今はこれを取らず諸士の批判を仰がむとするのである。

さて右表に於いて、第一自然は無生自然に相當し、之を靜的動的に分つ。この靜的とは無生且不能動なる自然、乃ち大地そのものの大部に

して、土石引いては山野稜谷等である。動的には同じく無生なれども、短時間に於いても變化活動する自然にして、水界—湧泉、流水、湖海—、火山等及空界、即ち氣候要素を之に含めたのである。その本源の不明なる火光音響などの如きも止むなく之れを假信する時は之れに屬せしむる。勿論生物源のものなること判明せるものは別とする。第二自然は有生自然に相當し、植物と動物とに分つ。之れも靜的動的と呼ぶは第一自然と相應して好都合なるかと思ひたれど差控へたのである。更に野生物と養殖物とに分つことを得ば効果あらむも、困難多く、且つ若し能ふ場合には養殖種は人文の部と直接不離の關係を持ち煩雜なること多きものである。

人文の部は第一乃至第三生活なる稱呼を試みたれば、定義を下さむに、第一生活地理とは第一次的乃ち個人としての生活の必須條件たる衣食住そのものに關するものであるが、或は之に産業及聚落を加ふるも任意かと思考する。何と

なれば衣食住と産業殊に食と農漁、又住と聚落とは關係極めて密接にして、地名を多く附與されたる上古には殊に然りである上に、衣食住そのものに依關する地名の種類多からぬが故である。然れども茲にはその産業、聚落等には第二次的意義を認めて、純理に従ひ、第二生活地理の領域と案じたのである。第二生活地理とは上述の外、交通、政治、軍事等にして、約言すれば共同社會の生活である。この第二生活と前の第一生活との關係は更に後述する機會があらう。第三生活は宗教、娛樂等の必需的形式生活以外の精神的な生活とも言ふべきものを第一第二より分ちて別項としたのである。

茲に於いて考ふべきは、名辭の地理學的分類に於いては、同種の項に入るべきものも、或はその名詞の主體となる場合あり、或はそれに對して副詞的—副詞、形容詞、感歎詞、接頭語等及名詞の副詞化—意義のものあり、例へば野田山寺等の野、山と、菅野、木山等のそれとは共

に一括すべきではない。或は前の二例は田、寺の部に考ふべきも、その如く分類せば、この分類の項目は山名・川名或は村名・町名・新田名等とならねばならぬ。されば余は各項目を二分して、本來名詞と、その他にしたのである。又この分類法は名辭に基けるものなるが、地理的考察は之に盡されたるにあらざること勿論である。語彙的集拾分類と、地理學的關係はこゝに累述せざるも、人類が如何なる場合に、如何なる理由により、如何なる地名を興へるかば史學的考證と、民族心理乃至は一般心理學的研究とによりて、起原論的原則を抽出し、そこに地理學的條件の脈絡、乃ち人類環境と人類本性の關係を探らねばならぬと思ふのである。この方面からも分類を試みたのであるが、それは後篇に述べる。

更に歴史は、時間によりて、人類の作り爲す事實を綴るが、その史的事實に地理學上參考すべき事ある場合は、地理學者は「時」を第二義と

して之を見ていゝ。吾々は時でなくて、人類文化の「階梯」といふものにそれを綴り込まねばならぬ。又その歴史の「時」は吾々は「場所」に立つかへねばならぬ。これは地理學一汎の事で、本文としては軌外に屬せむと思へば之に止める。民族移動と地名の關係も考究され得ることである。この局面觀は別に述べることにしてゐる。

四、その他

余は又地名の研究に圖式を應用したのである。その第一種は或る地理的地名の分布の模型圖式であり、第二種は各分類項別のグラフであり、第三種は分布圖である。

敍上は極めて亂雜なる記述に終つたのであるが茲に述べたる卑見は、實例に之を背振山塊と肥筑平野の二地區に試みたもので、その結果は纏めてこの續篇として發表する積りである。

(未完)